# ディベートの効果と可能性
## —「日本語演習Ⅰ」の実践報告—

高橋　純子

**要　旨**

本稿は、2014年春学期の学部留学生及び短期留学生を対象にした「日本語演習Ⅰ」の実践報告である。受講生は、学部１年生の留学生９名と短期留学生3名であった。本授業では、1）改まった場での口頭表現力の養成、2）書き言葉での文章表現力の養成という２つの学習目標を設定した。この学習目標を達成するため、口頭表現活動として１分間スピーチとディベートを行い、文章表現練習として、話し言葉から書き言葉へと文体を書き換える練習をし、ディベートの立論を書き言葉で書く課題を与えた。ディベート活動の過程で何を学ばせることができるのか、その効果と可能性を報告する。

【キーワード】１分間スピーチ　ディベート　改まった場での口頭表現
書き言葉での文章表現

# Results and Potentials of Debate Practice : a report on Japanese Seminar I

TAKAHASHI Junko

【Abstract】This is a report on a class for undergraduate foreign students in the spring term of 2014. The objectives of this class are to improve both formal speaking and writing proficiency. As for speaking exercises, one-minute speeches and debates were conducted, and as for writing exercises, exercises in changing the speech style from informal spoken sentences to formal written style sentences, and making arguments for debates were assigned. This paper presents the outcomes of the class activities and what the students learned from debate practice.

【Keywords】one minute speech, debate, formal style speech,
formal style writing

## 1．はじめに

今回紹介するディベート活動を実施したのは、筑波大学留学生センターで５科目開講している日本語日本事情科目の１つで、日本語中上級レベルの学部留学生１、２年生を対象にした演習Ｉという授業であった。この授業は３ヶ月から１年という期間での短期留学生も日本語レベルが当該授業を受講するのに十分足りているという条件で受講できる。十分な日本語力とは、留学生センターの研究生、大学院生を対象にした補講コースの日本語レベル分けでJ600（中級後半）以上とした。

ディベート練習は、上述した補講コース初級の授業でも取り入れられており、（永井2009）（関2010）その準備過程が詳細に記述されている。補講コース初級の授業と演習Ｉの対象受講生の日本語のレベルは異なるが、「言いたいことを相手に伝え、相手の発話を正しく理解する」という目的（永井2009）は、普遍であり、準備の過程は共通する。演習Ｉではこれに、「質問する力をつける」という学習目的も加えた。さらに、中上級レベルの受講生を対象にした本授業では、口頭表現技術の向上を目指すとともに、ディベート活動をレポート作成指導へとつなげようと試みた。

本稿は、ディベート活動の様々な過程、要素をレポート作成指導へと繋げていく試みを報告するものである。

## 2．「日本語演習Ｉ」の概要

演習Ｉでは、大学での学業に必要な口頭表現能力と文章表現能力の向上を大きな目標として通年の学習計画を立てている。春学期、秋学期と２学期を通して受講することが望ましいが、受講生の時間割によっては他の授業と重なってしまい、通年を通しての受講がかなわないこともある。受講生の人数などにより、活動内容などが入れ替わることもあるが、１分間スピーチとミニ討論会は両学期で実施し、原則として、春学期にディベート、討論会、秋学期には受講生が授業をするという形での発表（高橋2011）、討論会を実施し、それぞれの活動には、意見文やレポートを提出するといった文章表現の課題を出している。

しかし、あるテーマについて自分で文献を探し、資料を作成し、それを研究や調査としてまとめるという、いわゆるレポート作成を大学入学時までに経験してきた受講生は多くないようで、話し言葉とフォーマルな書き言葉との使い分け、章立ての仕方、小見出しの付け方、参考文献の提示など細部に渡る指導から、何をテーマに設定するのか、どのように情報収集するのか、集めた情報をどのように並べて、提示するのか、という指導が欠かせない。口頭表現活動と文章表現活動の効果的な連携を模索し、受講生の総合的な日本語力の向上を目的としている。

## 3．対象受講生と授業の内容

### 3．1　受講生の内訳

受講生は以下の通りである。

表１　受講生（計12名）の内訳

| | | |
|---|---|---|
| 学類１年 | 7名 | 中国（3名）韓国（1名）マレーシア（1名）オーストラリア（1名）チリ（1名） |
| 学類２年 | 2名 | 中国（1名）マレーシア（1名） |
| 短期留学生 | 2名 | 中国（2名）台湾（1名） |

### 3．2　授業の内容とその目的

以下の順序で授業活動を行った。

1）　１分間スピーチの練習をする。

自分の名前の由来などを中心にした自己紹介を１分間でする練習を行った。１分間の時間感覚を身につけること、短い時間でも簡潔に話すことで、かなり多くの情報を盛り込むことができること、何回も練習することでスピーチは上手になるということを体得することが狙いである。また、これは発言時間に制限のあるディベートでの簡潔な話し方を意識するためにも有効な練習であると考える。齊藤孝（2009）『１分で大切なことを伝える技術』PHP新書からの抜粋を使用し、１分間スピーチの練習の仕方を説明した。時間管理はWeb上のタイマーを使用し、授業内で各自がスピーチ内容をつぶやくという練習を３～４回した後、受講生はクラス全体の前で一人ずつ１分間スピーチを行い、他の受講生からの質問に答えた。

2）　レポートの文体練習をする。

前述したように、レポート形式でまとめるということを経験してきていない受講生、話し言葉と書き言葉の使い分けができていない受講生が少なからずいる。レポートのタイトルの選び方、小見出しの付け方、参考文献の提示の仕方など基本的知識とともに、書き言葉の基本的知識を与えるため、話し言葉を書き言葉に書き換える練習問題を作成した。さらに、作成したレポートを添付ファイルとして担当教師に送る際の適切なメール文の文面も考えさせた。

3）　ディベートのやり方を学ぶ。

主に（武田2014）『猫と一緒に学ぶディベートの本』からの抜粋を主教材とし、参考として松本（1996）、松本・河野（2007）をプリント教材として配布し、ディベートの方法、つまり進行形式、規則、審判の役目、評価基準、フローシートの書き方などを提示した。

ディベートを経験していた受講生は１名のみであった。日本語ではなく母語でのディベー

トであったと言う。ディベートの手順の書かれたプリントは3～4名の小グループで読み合わせた後、クラス全体で質疑応答をし、内容の確認を行った。

4）練習ディベートのグループ分けをする。

ディベートの進行形式を体得するため、比較的取り組みやすいテーマで、予行練習を行った。「魚か肉か」「コンタクトレンズかメガネか」というテーマで2回行った。

受講生12名をAグループ、Bグループ2つに分け、Aグループ6名は「魚か肉か」、Bグループ6名は「コンタクトレンズかメガネか」でディベートを行った。AB各グループは、3名ずつで「魚派」「肉派」「コンタクトレンズ派」「メガネ派」のチームを作った。テーマは比較的簡単なものであったが、それぞれのチームの主張を裏付ける資料となるものを探し、その資料の出典も必ず明示し、論拠とすることを徹底した。

翌週の授業時間（75分）1回を、受講生各自が持ち寄った資料を基に立論作成を始め、ディベートの展開予想、発言の順番などを話し合う時間に使用した。この授業内準備時間以外にも受講生たちは集まって、情報交換、話し合いをしていたようであった。

5）練習ディベートを実施する。

授業時間1回を1つのグループのディベートとそのフィードバックにあてた。予行練習であるので、進行上の間違い、例えば、立論の内容に関して質疑応答するところで、反論が出された場合など、教師が介入し、ディベートのルールを確認した。Aグループがディベートを行っている間、Bグループは審判を務めた。同様に次の回は、Bグループがディベートを行い、Aグループが審判を務め、審判が一人ずつ判定理由を述べた。勝敗は審判の合意ではなく、より多くの審判の支持を得たチームとした。最後に、ディベートを実際に経験してみた感想を参加者が述べた。

このような予行練習を2回行うことでディベート手順が身に付いていったようであった。また審判として他のグループのディベートを観察することで、ディベートの流れがよくつかめたようである。

6）ディベートのテーマを決める。

予行練習ディベートのテーマは教師の方から用意し、ディベート進行手順を確認したが、その後のディベートのテーマは受講生に決めさせた。3～4名の小グループで、ブレインストーミングをし、受講生同士で思いつくままに意見を出し合った後、各小グループから出てきたいくつかの候補をクラス全体で吟味し、2つのテーマ「捕鯨はやめるべきだ」「同性婚は認められるべきだ」が決まった。そして、6名ずつの2つのグループを新たに構成し、3名ずつ肯定派、否定派のチームに別れ、それぞれ準備作業にとりかかった。予行練習ディベートと同様授業時間1回を授業内準備に使った。

7）「捕鯨はやめるべきだ」「同性婚は認められるべきだ」のテーマでディベートを2週にわたり実施した。予行練習同様、各回審判が判定理由を述べ、勝敗を決め、最後にディベート参加者がそれぞれ感想を述べた。

8） 立論を書き言葉で提出する。

ディベートでは審判に向かい、意見を主張するので、基本的には「です・ます」の丁寧体で話す。これを書き言葉で書き、提出するという課題を与えた。その際、論拠となる資料の出典を明確にしなければならない。参考文献、URL、新聞記事の日付など必要情報を明示するよう指示した。

## 4．学生の取り組みと結果

受講生は概ね熱心に取り組んでいた。

### 4．1　発言時間の管理

web上のタイマーをプロジェクターで投影して、発言時間の管理を行った。驚いたことは、ほとんどのチームが3分間の制限時間ちょうどに立論を終えたことであった。後で尋ねてみると、何回も練習したという。学生の素直で真面目な態度が大きく影響しているのだろうが、1分間スピーチの練習が功を奏したのではないかと考えたいところである。

### 4．2　論拠となる資料の提示

各チーム、メンバーで分担して資料を集め、それを有効に使っていた。相手チームに資料を提示するだけではなく、審判に資料収集とその正当性をアピールする行動が見られた。ディベートのやり方を学ぶ前は、相手を攻撃し、やり込めることで勝利するのがディベートというイメージを持っていた受講生が多かったが、論拠となる証拠を集め、それを順序よく並べ、論理的に自分たちの主張を審判に認めてもらうことだと理解したようだった。

### 4．3　審判の役割

審判にはフローシートを書かせ、評価表に優劣の判定理由を記入することを課した。（資料1、2参照）そして、最後に各審判が判定と理由を述べ、得票数の多いチームを勝利者とした。審判たちは、相手方の立論に関して質疑応答するべき時間に、反論を述べたこと、立論で述べられていないことが、最終弁論で出されたこと、などの違反事項に気づき、判定理由として挙げていた。また、聞き取りにくい発音や、理解しにくい発言に関してもコメントを述べ、判定理由としていた。

### 4．4　書き言葉での立論作成

立論を書き言葉で提出する課題を与えた。上述のように、3名でチームを組むため立論を共有することになる。内容が同じものになるというところが、この課題の弱点であった。しかし、提出された書き言葉での立論は、まったく同じというものはなく、各自がそれぞ

れのまとめ方をしていた。参考文献、URLも形式通りに記載されたものが提出された。レポート作成指導にあたり、これまで、なかなか徹底できない参考文献の記載であった。ディベートという場では出典を明らかにすることは必須であるため、受講生は参考文献記載を知識としてではなく、体得したようだ。

## 5．ディベート活動の可能性

大塚・森本（2011）は、伝える力・聴く力・問う力を育てるためには、話し合いへの参加だけでなく、「観察」を行うことと、参加した人と観察した人とが気づいたことを述べ合う「振り返り」が重要だと述べている。観察者グループは議論の様子を観ることで、発言や態度を客観的にとらえることができ、自分の姿を俯瞰的に観る力を鍛えることができるという。ディベートにおいて、説得を試みる対象は議論する相手ではなく、第三者の聞き手、審判である。ディベートをするグループとそれを観察して評価する審判グループをおくディベート練習は、「俯瞰的に観る力」を育て、コミュニケーション能力を高める手段として有効であろう。

さらに、ディベートのためには、自分の主張だけではなく、相手の論拠も想定し、それに対する反論を準備し、相手側からの反論への応答を準備しておくという周到さが求められる。あるテーマに関して、あらゆる方向から検証することを通して、発想の豊かさが培われるだろう。これは、受講生がこれからの大学生活で是非とも養っていきたい能力であろう。

これまで何度かディベート練習を試みてきたが、それは、口頭表現能力の養成を念頭においた視点からであった。今回は、それに加え、立論作成を書き言葉の文章表現練習として活用してみた。そして、次学期に予定しているレポート作成へと繋げようと試みた。松本・河野（2007）は、レポートと論文は、文書による公共的なコミュニケーションであると述べている。テーマ（問題設定）を決め、情報収集をし、問題点を指摘し、解決策を追究していく過程はレポート作成とディベートで共通する部分がある。一連のディベート過程の経験がレポート作成に生かされることを期待している。

レポート作成の技術的側面として、話し言葉と書き言葉の使い分け、参考文献の提示、「まず」「第一に」「第二に」「最後に」など論点を明確にするサインポスティングの使用などが欠かせない。この指導がディベート実践を通して、簡潔にできたという感触を得た。さらに、ディベートでは発言時間の制限がある。この制限が簡潔な文章を書かせることに効果があると考える。

## 6．まとめと今後の課題

以上、ディベート活動の目的、手順、成果、コミュニケーション能力を高め、豊かな発

想を培う一手段としての可能性などについて報告した。さらに、本授業では、ディベートという口頭表現活動の特徴を捉え、文章表現活動へと繋げようと模索した。

ディベートを通して、受講生は問題設定、情報収集、情報の出典を明らかにすること、賛否両方の立場から物事を見ること、論拠となる証拠を並べ、ディベートの規則のもと論理的に自説を説いて行くこと、ディベートの流れの中での自分の位置、審判としての客観的視点などを学んだ。そして、簡潔な文章、書き言葉の文体で文章を書く基本も学んだ。

しかし、あらたまった場で、ある程度まとまった意見を述べるという機会を持ち、発言するという経験をしていない１年生の受講生は多く、「改まり具合」がなかなか実感できないようである。まず、「ちょっとは」「少しは」「多少は」などの言葉の選択、音声変化「やはり」「やっぱり」「あんまり」「あまり」などを始めとする口頭でのくだけた言い方と改まった言い方の使い分けに注意を向けるようになり、さらに今後、大学生として改まった場にふさわしい発言ができるようになることという課題が残っている。話し言葉、書き言葉を包括しての文体の習得が求められていると考える。受講生が興味を持って取り組める活動の中で文体の違いに注意を向けさせ、使い分けを実践できるような仕組みを模索していきたい。

本稿は、教師の視点からの報告であるが、受講生はどのようにこれらの活動を捉えていたのか、どのような手応えを感じていたのか、調査していきたいと考えている。そして、春学期の授業が秋学期にどのような成果をもたらしたのか、春・秋学期を継続して受講した学生たちを見ていきたい。

## 参考文献

大塚裕子・森本郁代（2011）『話し合いトレーニング　伝える力・聴く力・問う力を育てる自律型対話入門』ナカニシヤ出版

齊藤孝（2009）『１分で大切なことを伝える技術』PHP新書

関裕子（2010）「ディベートに向けた活動と成果・課題―2008年初級後期「J400での実践報告」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第25号：57-65

高橋純子（2011）「聞き手とのコミュニケーションのある発表指導―「授業」形式の発表活動―」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第26号：77-85

武田顕司（2014）『猫と一緒に学ぶディベートの本』MyISBN-デザイン社

永井涼子（2009）「初級におけるディベート準備授業の試み」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第24号：85-95

松本茂・河野哲也（2007）『「大学生のための　読む・書く・プレゼン・ディベート」の方法』玉川大学出版部

松本茂（1996）『頭を鍛えるディベート入門』BLUE BACKS 講談社

**資料１ ディベートフローシート**　（松本茂・河野哲也（2007）『「大学生のための　読む・書く・プレゼン・ディベート」の方法』P.152　玉川大学出版部）

論題：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

年　月　日

| 肯定側立論 | 否定側立論 | 否定側第１反駁 | 肯定側第１反駁 | 否定側第２反駁 | 肯定側第２反駁 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1. | | | | | |
| | 2. | | | | |

資料2　ディベート・フィードバック用紙　（松本茂・河野哲也（2007）『「大学生のための読む・書く・プレゼン・ディベート」の方法』P.158　玉川大学出版部）

評価者：　　年　　月　　日

肯定側メンバー：　　否定側メンバー：

| 肯定側　主な論点 | 否定側　主な論点 |
|---|---|
| | |

判定：　肯定側　・　否定側　の勝利とする。

| 肯定側　良かった点　改善すべき点 | 否定側　良かった点　改善すべき点 |
|---|---|
| | |

| 判定理由： |
|---|
| |